

---

# 西の魔女は眠る

蓮葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

西の魔女は眠る

### 【Nコード】

N7806U

### 【作者名】

蓮葉

### 【あらすじ】

ある日、「隠者」の屋敷の隣に、いきなり塔が生えた。

「眠り姫の塔」が現れてから、隠者の屋敷と孤児院しかなかった平和な街の外れに次々と事件が……？

かつこついで本の虫の「隠者」と、孤児院の院長代理をはじめとする魔女たち、彼らを取り巻く魔術師、王族、その他の人々の間の、ほのぼのあり、恋愛あり、シリアスありの、ちよつと歪んだ御伽噺（作者サイトにそのうち転載するかもしれません）

## プロローグ

先生が、私の名前を呼ぶ。

「母がいないのです。」

もう、私に、魔法を学ぶ意味はありません」

母は、父から離れ、女手一つで私を育てた。

私の魔法の才を、最後まで信じていた。

私を、天才だと、私を産むために自分は生まれてきたのだと。そう、信じていた。

それが、間違いだと、最後まで認めなかった。

「あなたは、西の魔女が、何者か知っているわね。」

全ての魔女の中で最も強い力を持つ魔女。人の持ちうる限界を越えた魔力を使える魔女」

私は、頷いた。

「それは、自らの名前を失うことでこの世の理から離れ

他人のためにしか『西の魔女』の力を使わないと言う制約により成し得る呪い」

「先生。今更、授業ですか？」

「そうよ、私の最後の授業」

私は、目を見開いた。

先生　現在の西の魔女を見上げる。

「西の魔女の代替わりは、いつ起きるかわからない。」

西の魔女は長生きだから。その死期を悟ったら、次の西の魔女に相応しい魔女を探す。

いいえ、私の場合は逆だった」

先生が何を言おうとしているのか、わからない。

いや、わかりたくない。

「あなたほど、西の魔女に相応しい人はいないわ」

嘘だ。

だって先生の弟子には、もっと素晴らしい魔女がたくさんいた。私を特別扱いしたことなど一度もなかった。

「でもね

私は、あなたの先生として

本当は、あなたが、あなた自身の生きる希望を、生きる意味を見つけてくれることを

望んでいるわ。

そのことを、忘れないで」

## 隣人は西の魔女

朝、目覚めると、家の隣に塔が建っていた。

「なんだこれは・・・」

しかもどう見ても今日昨日建てられた塔ではない。

塔を構成する石は風雨にさらされ、くすんでその年月を語っている。

昨日までは、間違いなくこんなものはなかったはずだ。自分がこの街に居を定めたのは二年前。確かにほとんど外に出たことはなかったが、だからといって窓の外を見たことがないわけではない。

この屋敷は街の一番外れ、隣には小さな孤児院が一つ、もう一方の隣には森しかなかったはずだ。

「誰かが・・・隠していたのか」

呆然と呟く。

それでも彼は魔術だけではなく、錬金術や故実、歴史に星詠み・・・ありとあらゆる知識を貪欲に吸収し、今では、各地の王家・貴族・魔術師の中で、彼の存在を知らぬものはいないほどの実力者だ。

そんな彼は、魔術師の枠に当てはまらないと自分で自負しており、『賢者』と呼ばれることを最も喜ぶ。

しかし、やはり根本は魔術師だ。二年もの間、自分のすぐ側にこんな大きなものを隠されておきながら気づかなかったのだ。

彼の肥大したプライドは、現在は、完膚なきまでにボロボロであった。

しばらくそのまま落ち込みながらも、何一つ見落とすまいと塔を観

察する。

この塔を隠していたのは、間違いなく魔術だ。そんな魔術を、誰が、何のために、使っていたのか。自分に不利益はないのか。それを、早急に判断しなければならぬ。

塔は、細く高く、天を突いて建っていた。普通の人間が住むためのものではない。侵入者を拒み隠れ住むためのものであろう。

建築様式は古い。見てすぐに古い塔であることはわかった・・・おそらく百年近く経っているだろう・・・それにしてもそっけない塔だ。機能的なものしかなく、遊び心がない。

これを作った者が魔術師なのか、それとも他の誰かなのかは知らないが、合理的で面白くない性格をしているに違いない、

しかし、一番の特徴はそこではない。

なにより驚いたのは、塔には一抱えほどもある太い棘を持つ茨が戒めのように這い回っていたことだ。

まるで侵入者を拒む鎖のようなそれは、どうみても尋常ではないほどに強力な魔法により生み出されたものであることは明白だった。

一体何を守っているのか。

そこまでして守るものは何か。

「茨・・・？」

そこまで考えて、彼は顔をしかめた。彼の合理的で理論的な（と本人は思っている）思考に、何やら不本意にメルヘンチックな考えがよぎったのだ。

百年の茨に守られた塔にいるのは、眠り姫に決まっている。

あまりにもアホらしい考えだった。

しかし。

見れば見るほど塔はそれらしく、考えれば考えることにほどに辻褃が合う。

確かに、眠り姫を守るためには塔が必要だ。古来、貴人を囲うのは塔と決まっている。

茨で戒めるのは百年の眠りを覚まさないため。

こんな魔法生物を置くのは膨大な魔力の無駄遣いでしかなく、別に兵士を置いてもいいようなものだが、そこは様式美とか言いようがないのだろう。

見えないようにしていたのは、今までの伝承にはないが、上手いやり方だと思う。

迷い込んで来る人間を減らせば、余計な怪我をする人間もおらず、塔を管理する者の手間も省けるというものだ。

それでは、塔が姿を表したということは……。

「百年が経ったということだな」

一人暮らしであるため、妙に独り言の多い彼は、そう結論づけると窓に背を向け、離れようとした。

その時。

突然、轟音がして、空が明るくなった。

「花火?!」

慌てて窓に駆け寄った彼は、塔のてっぺん付近の窓から、するすると信じられないほどに大きな幕が降りて来るのを見た。

そこには、でかかかと文字が書かれている。

「・・・眠り姫争奪戦?!・・・なんだこれはあああつ?!」

彼が叫び終わると同時に、野太い男たちの雄叫びが響き渡る。

何事かと下を見ると・・・そこには、塔の周りを埋め尽くす程の人が集まっていた。まるでお祭りのような様相で、どうも屋台も出ているようである。

彼は、ワナワナと震えた。さっきから塔にばかり気を取られており、下に全く気づかなかった自分に呆れたこと。

と、もう一つ。

「お前ら、俺の敷地を荒らすなーっ!!!!!!」

人の波は、彼の屋敷の敷地にまで及んでいたのだった。

## 第2話

「まったく、あの塔には驚きましたな」

仰々しい貴族風のカツラに、毒々しい赤とキラキラしい金をふんだんに使った、いかにも成金と言った出で立ちの男は、媚びる様に笑った。

「ふん。こんなつまらないことで驚くとは、貴方はよっぽどつまらん人生を送ってきたのだな」

生まれ育った地方の名前から、グリードリスの賢者とも、西の隠者とも称えられた彼の商売は、正確には客商売ではない。客が彼を崇め、媚びへつらい、頭を下げてくるのに応えてやるだけの、単なるお情けだ。

今も、人に言えないような薬を頼んできた成金は、彼の機嫌を損ねまいと必死に尻尾を振っている。

「さすがは賢者様！あの塔があることを知っていたからこそ、このような辺鄙な地にお住まいだったのですな！」

「・・・・・・・・」

彼は見る間に不機嫌になった。

塔につめかけた野次馬と姫を射止めて一攫千金を目論む連中を、怒りにまかせた魔法で自分の敷地から一掃してから、はや7日が経つ。もともと、一掃したのは自分がの敷地からだけであるので、塔の付近までは全く何もしていない。

静かだった屋敷の付近は、浮かれた人々の波で埋めつくされ、不快なことこの上ない。

「そう言えばご存知ですか？」

静かに押し黙った彼の機嫌を直そうと、成金が慌てた声で話を続ける。

「あの塔を隠していた魔法を解き、姫を百年の眠りからさまそうと  
いう魔女が現れたのを」

「魔女・・・」

彼は険しい顔をして、唸った。

自分が見破ることのできなかった魔法。バカバカしい程に大掛かり  
なああの仕掛けを解いた魔女。

「興味がお有りですか?! そうでしようとも!」

成金は、彼の気をひくことに成功したことに満面の笑みを浮かべ、  
そして、秘密めいて声を抑えた。

「なんと・・・しかもその魔女は、あの『西の魔女』ではないか  
ということなのですよ!」

彼は、瞠目した。

西の魔女。

この世の中には少なくない数の魔女がいて、四人いる方位の魔女は  
人の力を超える程に強大な魔力を持つ。

そして、その中でも特異な存在が、西の魔女だ。

様々な制約はあるが、方位の魔女の中でも最も強い力を持ち、しば  
しば歴史に登場する。

時には国を滅ぼす悪の魔女として、時には人を助ける聖女として。

他の方位の魔女が、どちらかというと世間から引きこもって暮らし

ているのに対し、西の魔女だけは違っている。代によって、悪の魔女と評価される者もあり、聖女と扱われることもある。

とにかく評価が両極端なのだ。

しかし、最も特異なのはそこではない。

不思議なのは、西の魔女を名乗る人間は、全て自分のことを『名無し』だと言つということだ。

魔術師・魔女ならば、自らの名を持たないわけがない。名とは、彼らの魔力の源だ。

どんなに隠しても、魔力を感じ取られれば、その真名を知ることができずとも、その存在を感じ取ることはできる。

しかし、西の魔女は別なのだという。

その魔法に触れた他の魔術師がどれだけ解析しても、西の魔女の真名の片鱗すら感じ取ることができないのだ・・・とまことしやかに伝えられている。

彼ももちろん、魔術を学んだ者として、西の魔女が真名を持たないなどという伝説は信じていない。

他の魔術師と同様、ただ、真名を隠しているだけだろう。

しかし、そのような伝説ができるほど、真名を掴ませないほどに強い魔力を持つ魔女・・・。

興味がないわけがなかった。

「その魔女がどこにいるのか、ご存知か？」

「もちろんですとも！噂では、王宮にて賓客としてもてなされているとのことですよ！」

王宮。

伝手ならばある。

――生ける伝説と言われる西の魔女がどの程度のものか、試してやるう。

彼は、不敵な笑みを浮かべ、心を踊らせた。

### 第3話

「方位の魔女」というのが、何のために存在するのかは、謎とされている。

彼女たちが必ずしも方位に対応する場所に住んでいるわけではないことから、単なる尊称という説が有力だが、名前を継ぐことで膨大な魔力を手に入れることから、やはり何か意味があるのではないかという説も根強い。

とにかく、生ける伝説であることには間違いない。

その中でも西の魔女。

方位の魔女の中でも、最も強い力を持つと言われる魔女。その名前を持つ魔女にまつわる伝説も最も多い。

そう、西の魔女だとすれば、あの塔を隠し、茨で塔を覆い、そしてそれに自分が気づかなかったことも頷ける。

実在すら確かめることが難しい相手に、魔術師として、やはり会えるのであれば心が踊る。

特に、今代の西の魔女は、あまり目立った噂のない、珍しい西の魔女だ。唯一目だった功績があるとすれば、その、歴代トップを誇ると言われる、150年に渡る長い在位期間かもしれない。

先代・先々代が強烈だったから余計に、かもしれないが。

先代の西の魔女は様々な『善き』奇跡を起こしたとして聖女と呼ばれ、その前の西の魔女は逆に、私欲で世界のバランスを崩し戦へ導いたと言われ『悪しき』魔女として有名だった。

しかし、影が薄いとはいえ西の魔女。

あの有名な『西の魔女の特性』を持ちつつ目立たないというのは、もしかしたら研究肌なのかもしれない、ならばお仲間だ・・・と、

彼は勝手な推理をし勝手に親近感を覚えていたのだった。

引きこもって研究などしていると、隠者などと呼ばれることも多い。隠者という暗いイメージが強いが、一人怪しいことを企んでいるというイメージは、実は嫌いではない。

人に自分を説明する際には、謙遜の意味もこめて『隠者』と名乗ることも少なくない。

とはいえ、彼は別に人の多い場所が嫌いというわけではない。屋台などが出ていれば、なんとなく見てみたくなる程度の好奇心はあった。

「しかし、これは人が多すぎるだろ・・・」

塔の周りには、野次馬どもが溢れかえっている。

あちこちに赤い屋根の屋台が出て、商売をしている。この街は小さいとはいえ王国の首都だから、それなりの人数は住んでいるが、間違いなくこの街の人間ばかりではないだろうと思える人出だった。

これは、朝から晩まで屋敷の外がうるさいはずだ。

一度、死人が出ない程度に魔法をぶちかましたため、彼の敷地内にはさすがに誰も入ってこなくなったが、音は容赦なく漏れてくる。

幸い、彼は育った環境から、あまり音を気にしない性質であったが、神経質な人間なら暮らせなくなっているだろう。

「なんだと?! もう一回言ってみろ!! このクソガキっ!!」

突然、男の野太い声が辺り中に響いた。

何事かと思ひ振り返ると、良くある光景がそこにはあった。

食べ物の屋台を開いている子供達に難癖をつけるヤクザもののごろつき、というやつだ。

めんどくさい場所に居合わせてしまった・・・と彼はその場を離れようとするも、逆に好奇心にかられた人波に揉まれ、動けなくなっていました。

「ここはあんたたちの土地じゃないだろ！誰が商売しようと自由なはずだ！」

年齢は15・6ほどか。燃えるような色をした見事な赤髪をポニーテールに結び上げた勝ち気な女の子が、青い目を煌めかせて怒鳴る。そういえばどこかで見たことがあると悩み、少し経って思い出した。確か、位置的には彼の屋敷に隣に位置する孤児院の子供だ。年齢が高いからか、子供たちのまとめ役のようなことをやっていたことを思い出す。

とはいえ話したことはない。見かけたことがあるだけだ。

「なんだと、クソガキ！！社会のルールってやつを教えてやるうか？ああん?!」

喧嘩は縁日につきもの出し物とも言える。

野次馬の人波があつという間に湧き、彼の身体をもみくちやにしたあげく、あらぬ方向へと押し流し・・・。

とん、と押し出された先は、人の輪の中だった。

そう、なんと間の悪いことが。

ごろつきと少女とを結ぶトライアングル上、人に囲まれた舞台の中に躍り出てしまったのだ。

## 第4話

睨み合っていたごろつきと少女がこちらを見る。  
もちろん、辺りにいる人波も、例外なく全員が彼を注視していた。

(これは、まずい・・・)

彼は、冷や汗をかいた。

不可抗力とはいえ、今の彼は、乱入者以外の何者でもない。

ごろつきと少女は乱入者の意図を図り兼ねて沈黙してしまった。

そして、人波はいち早く注目から期待へとその視線の意味を変えて  
いる。

その期待の意味を彼は痛いほど理解していた。なにしろ、さっきま  
で彼自身が野次馬の人波の一人だったのだ。

確かに、ここで「間違えました」と言って、いや、何も言わずに何  
事もなく人波に戻ることも可能だろう。  
しかし、それでは間違いなく場は白ける。

何より、そんな自分はとてもかっこ悪い！

彼は見栄っ張りである。弱いと思われるのも、間抜けだと思われる  
のも、大嫌いなのだ。

目立つのは好きじゃないのに、などと心の中で毒づきながら、ここ  
でするべきことは一つだと心を決める。

そう、ヒーローになっておくしかない。

彼は、ひとつ咳払いをした。

「あー、そこまでにしておくんだな。こんな小さい子たちに、かわいそうじゃないか」

我ながら、ほぼ棒読みに近い、やる気のないセリフである。だってなんとなく恥ずかしい。

瞬間、ごろつきの眉が怒りに跳ね上がったのを見て、彼は早くも後悔していた。

別に怖いわけではない。ただ単に、恥だけかいて得るものはなさそうだなあと思ったのだ。

「何を言っただやがる！関係ないやつはすっこんでろい！！」

まあ、そうくるだろうな、と彼は納得した。確かに自分は全く関係ない。ごろつきの言うことも一理あるのだ。

まあ、あくまでごろつき視点では、だが。

一方で、野次馬たちは盛大な歓声をあげた。

「そうだそうだー」

「兄ちゃん負けるなー！！」

「やっちまえー」

「助けてあげてー！！」

無責任な言葉が無責任な熱狂を纏って飛び交う。

基本的に、彼が勝って少女を救い出しても、あっという間にごろつきにやられても、どっちでも彼らは楽しむに違いないのだ。全く、気楽なものだ。

ほんとに、何故こんなことになったのやら。

今の状況にほんの少し黄昏していると、間が持たなかったのか、いきなりごろつきは殴りかかってきた。大きな身体と盛り上がった筋肉、鈍い動き。典型的な力馬鹿といったところか。

肩の使い方も力の入れ方も、我流であり、素人に毛の生えたようなレベルだった。

これならば苦戦することもないだろう。

顔を狙った拳を何なく避けると、ごろつきは不思議そうな顔で空を切った自分の拳を見つめ、顔を真っ赤にした。

「生意気な！！」

個性のない罵声と共に、繰り出された拳が、もう一度空を切る。

もう一度。

もう一度。

ひらりひらりと蝶のように軽く拳をかわす。

まったく、呆れるくらいに速さとコントロールがダメで、隙だらけだ。

こんな程度の腕前で、よくも自分に喧嘩を売ろうなどと考えたものだな。

彼は嘲笑を浮かべた。

彼の外見は、25・6、いかにも知的労働者という細身の身体をしている。

その外見にまだ騙されているのか、何故拳が当たらないのか、ごろ

つきは全くわかっていないようだ。

見た目に踊らされるとどうなるか、年長者として、じっくりと教え込んでやる。

一発で叩きのめしてもいいがつまらない。  
拳を軽く急所に当て続けることで力の差を教えてやるか。いや、その意図もわからないほどの馬鹿だと、徒労に終わるだろう。  
ならば、派手だが威力を抑えた魔術構成を組んで遊んでやるか。

にやにやと考えながらごろつきの拳をかわし続けていた、そのとき。  
突然、あたりの魔力にブレを感じた。

誰かが魔術構成を始めている。

彼は思わずあたりを見回し、その魔術構成を解析する。

「w a a a r i a l w s e t - w a a a . s . k . b  
o m t e l e !」

しかし、解析するまでもなく、声が響いた。

その声は、ごろつきに睨まれていた赤毛の少女のものだった。

## 第5話

幾筋もの風が、地面を削りながらみるみるこちらに向かってくる。

大馬鹿めが!!

素早く魔術構成を組み立てる。

大声で叫んだため、彼女の構成はバレバレだ。

風に干渉し、指定した場所で吹き上げる魔法。

しかし、指定場所も曖昧であり、威力の制御もされていない。

おそらく大した威力は出ないだろうが、こんな大雑把な魔法を人ごみで使うなんて狂気の沙汰としか言いようがない。

「平行に広がれ  
c . 1 | h .」

一瞬の囁きのような彼の詠唱と共に、迫り来る風の魔法と人波の間をきらめく透明の風が吹き荒れ。

その風が去った後には、ただ、抉られた地面だけが残った。

「・・・魔法使い・・・」

ごろつきは、目をこぼれんばかりに見開き、喘ぐように呟くと、転げるように人波に飛び込んだ。

「逃げたぞ!!」

「かつこ悪いぞ!!」

野次馬たちが騒ぎ立てる。

しかし、ごろつきにしてみたら仕方のない反応であろう。

魔法や魔術と言われる『技』は、一部の知識階級しか知ることを使

うこともできないものだ。

一般市民は魔法使いと呼び、彼ら自身は魔術師と自称することの多い彼らは、一般市民にとって、特別な階級を表す。と、共に、魔法を使えるということは、普通の人間では太刀打ちのできない武器を持っているということあらわす。

丸腰で、完全武装している人間と戦えるか、と聞けば、よっぽど無謀な人間でない限り、誰もがNOと言うだろう。

「さて」

彼にしてみれば、ごろつきの反応などどうでもいい。

今、気にするべきは、この、『見習い魔女』のとんでもない行動を賤けることだ。

自分の魔法をあっさり相殺されたからであろうか。呆然と立ち尽くす少女。

ゆっくりと歩を進め、その前に立つ。

「歯を食いしばれ、この、大馬鹿者！！」

そのまま、平手で、彼女の頬をぶった。

彼女は悲鳴をあげて、地面に倒れた。

「こんな場所で、場所の指定も人の指定もせずあんな魔術構成を組むなど、何を考えている！

何より、大声で構成をわめくやつがいるか！

お前の師匠は何を教えている！」

魔術構成は、機密扱いされている。

他の魔術師に自分の知識を盗まれないように・・・というよりは、

むしろ一般人に理解されないように、だ。

本来ならば何の魔法教育も受けていない一般人には何の言葉かわからないかもしれないが、それでも一部の勘のいい人間が魔術構成を理解してしまい、身に過ぎた魔法を間違って唱え、コントロール不能に陥ったりしたら・・・どんな危険が起こるかわからない。

だから魔術師は、基本的に構成を前もって魔術具に溜め、自分なりのキーワードで発現するようにしておくのが常だ。もちろん、時間短縮の意味もあるが。

もし、人前で一から構成を組み立てなければならぬときであつても、他人に聞こえない囁きで詠唱するのが常識である。

「だって、あたしは、あんたが苦戦してるから・・・だから・・・」

少女は、起き上がり、弱弱しく言葉を繋げた。

「お前はバカかっ！

苦戦しているのか、遊んでいるのかもわからんのか！！」

少女は、目を見開く。強い瞳で彼を睨みつけた。

「な・・・なんだって?!

あんたがそんなことをするから、誤解するんじゃないか!

人の喧嘩に勝手に入ってきて、勝手にそんなことをするから・・・

「ジル、やめなさい」

さらに言い募ろうとした少女の声を、凜とした女性の声が遮った。

赤毛の少女の後ろ。

赤い屋根の屋台の向こうに。

濃茶の髪と緑の瞳の女性が現れた。

第5話（後書き）

「waa arial w set - waa a・s・k・b  
omte le!」

（私は、風を動かす。そして私は、あれを吹き飛ばす）

「c・i・h

）コード1・平行展開

## 第6話

「先生？」

今までは、大人に張りあおうとしていたのだろうか。

ジルと呼ばれた少女の目から強い光が消え、あっという間に幼い表情に変わった。

あんたがこの『見習い』の師匠か？

しかし、そう問おうとするよりも早く、彼女は腰を折り、深々と頭を下げ、彼に儀式ばった礼を行った。

長い濃茶の髪は肩からさらさらとこぼれ落ち。

頭をくるりと取り巻く華奢なサークレットがさらりと揺れる。

見た目24・5といったところか。

背は比較的高め。顔は並である。

服装は質素、いや、むしろ粗末と言えるほどの赤みがあった薄茶の長衣。

きつと人波の中に入れば、誰も気づかないであろうと思われるほどに、目立たない、普通の女性だ。

しかし、胸に手を置き、礼を行うその姿は、凜とした威厳に満ちていた。

そう、1000年を生きた『隠者』である彼が、ほんの一瞬でも気圧されるほどに。

「高名なグリードリスの賢者様と存じ上げます。」

わたくしは、アルトウールの森の入り口にある孤児院の院長代理でございます」

「院長代理？」

彼女の長衣は多少野暮ったく、街の女性が着る簡素なものである。

また、サークレットは古いが、魔道具独特の波動は感じない。

いや、そもそも彼女自体から、魔道具を含む魔法の気配自体を感じない。

そもそも魔術師であるならば、少なくともどこに行くにも防護のための魔法の気配はあるのが常識だ。

魔術師ではない？

「念のため聞くが、あんたがこの『見習い』に魔法を教えているのか」

女性は身を起こし、静かに首を横に振った。

少し口ごもる。

「彼女は魔術師でも『見習い魔女』でもありません。

ただ、私たちは大所帯ですので、洗濯物を乾かすために、簡単な風の魔法を使います。

おそらく、それをアレンジしてしまったのだと思います」

そのあんまりな言い訳に、彼は、ぱくりと口を開けて、盛大に呆れた。

魔法とは、神秘であり深秘であり、特殊な技能と深い知識が必要な深淵な学問である。

少なくとも、魔術師はそう思っている。

とはいえ、実は、簡単な魔法であれば、意味がわからずとも、正しいイメージと呪文の発音で効果が出てしまうのである。

少女の魔法を思い出してみる。

螺旋を描き、ある一定範囲に吹き荒れる風の魔法。

おそらく店の一つは吹き飛ばしたであろうその勢いさえ取り除いて考えれば、確かに……。

そう言い訳も可能だろう。

しかし、それはあくまで言い訳だ。

こんな大勢の人間たちの前で、そんな馬鹿げた言い訳で、自分を言いくるめようとするのか。

腹を立てながら、彼は進退きわまつたことを感じていた。

「グリードリスの賢者様。

もちろん、魔術師の掟は心得ております。

人前であるような危険な魔法を使うなど、言語道断。

掟破りを賤けてくださった賢者様には、心よりお礼を申し上げます。

わたくしはこの子の保護者代わりです。

どうぞわたくしも同じようにお叱りいただき、お許しのほどをお願いいたします」

もう一度深々と腰を折る。

関係は完全に逆転していた。

もし、ここで「許す」と言わなければ、野次馬たちは彼を狭量な人間と見るだろう。

そもそも、魔術師として当然の躰とはいえ、多くの人々の前で、少

女を殴つたのだ。

その保護者がここまで礼を尽くして、少なくとも「謝っている」「よ  
うに見せている。」

通常の間人ならば、『院長代理』の態度を立派だと思い、それでも  
許さない『頑固な魔術師』に眉をひそめるだろう。

「・・・そうだな。よく言っけてきかせてくれ」

彼は、苦々しく言うと、すぐにきびすを返し、人波へと紛れた。

一瞬たりとも、あの女の顔を見ていたくなかったのだ。

なんて馬鹿馬鹿しい嘘だ。

なんて鉄面皮な嘘つき女だ。

彼が嘘に気付くとわかっていて言ったならば腹黒いし、気付かない  
と思っていたならば、まるっきりに彼を侮っている。

俺が、この俺が、あれだけ至近で魔術構成を読んだというのに  
『伝授』を受けた魔法と、ただ発動しただけの魔法を間違えると  
思うのか！

そして何より、『世間の目』を味方につけ、彼の言葉を封じたあの  
やり口に腹が立ってたまらなかった。

つまり・・・彼は、手玉にとられたことが、悔しくてたまらなかつ  
たのだ。

## 第7話

「先輩が人助け！」

しかも嘘をつかれた上、詰ることもなく退却！

その『院長代理』、おもしろい、おもしろいー！！」

通常ならば静まり返っている屋敷に、朗らかな馬鹿笑いが響いた。

『隠者』の機嫌の悪さはもちろん絶好調だ。

目の前では、招かざる客が笑いすぎて椅子から落ちた。

見た目は25・6。彼と同じ年齢に見えるが、もちろん実年齢は『若造』といえるものではない。

くすんだ色の縮れた金髪と煌めく青い瞳。その整った顔立ちは、彼の本質を知らない者であれば『夢の王子様』と憧れることであろう。

「笑うな、フェモイル fee - moi」

彼が言葉を発すると共に、笑い転げていた男の体がぴたりと止まった。

そのまま震え出す。

「・・・せんぱあい、真名まなで呼ぶのやめてくださいよ。心臓きゅつと絞られるみたいで恐ろしいんすよ」

「黙れアルブレヒト。」

60も過ぎた男が、『せんぱあい』などと媚びた声をあげるな情けない。

『恐ろしいんすよ』なんて若者言葉を無理して使うな気持ち悪い。

大体俺はお前の先輩になった覚えはない。一秒たりともない。

馴れ馴れしく呼ぶな、この満フェモイルちる月が。さっさと王宮に帰れ」

「ごめんなさい、だから真名やめてくださいって……うう……  
脂汗出てきた」

おどけた言葉遣いで飄々と軽口を叩き、親しげに訴え、情けない声をあげながら、しかしその瞳の奥に狡猾な光が見え隠れする。

同じ師匠に学んだと言って彼に近づいてきたこの魔術師は、彼が現在居を構えている小国エルツヘンの王宮魔術師である。

彼にとって見れば努力の足りないひよつこだが、世間的にはどこへ出ても恥ずかしくないほどの大魔術師だ。

高名な賢者との人脈を王宮での『世渡り』の一つとして誇示しようとするアルブレヒト。

一方、『隠者』などと言われながら、彼もまた、王宮への人脈として、アルブレヒトを利用している。

お互いに利害で結びついているかのように見える二人だが、感情的には決して嫌いあつてはいない。

むしろ、おそらく、利害がからまなければ、アルブレヒトほど彼に近い人間はいないだろう。

「ふん、お前も暇なヤツだ。」

「一体今回は、どんな難題をふっかけにきた？」

魔術師の力の源とも言える真名を連呼されたダメージが、それとも単に大げさなだけか。

胸を押さえてイヤそうに呻いていたアルブレヒトは、顔を上げ、首を横に振った。

「今回は、依頼ではありません。」

「お引越しのご挨拶です」

「お前、結婚して少し前に居を構えたばかりだろう。もう追い出されたのか？」

アルブレヒトは、ぶるんぶるんと音をたてて首を横に振り、早口でまくしたてた。

「ち、違います違いますっ！そんなわけじゃないですか！なんて縁起でもないことを！」

そこまで強硬に否定するということはむしろ怪しいが、話の先が気になるため、まぜっかえすのはやめる。

「先輩の屋敷の隣・・・塔の真下の土地があるでしょう。」

あそこに屋敷をたてることとなったのです

「誰の屋敷だ。貴族の妾か」

「違いますよ。そんなことでわざわざ私が挨拶にくると思いますか？」

アルブレヒトはさすがに王宮魔術師のプライドがあるのか、不満そうに声をあげた。

しかし、隠者はにやりと笑った。

「そうか、お前の妾か。お盛んだな」

「やめてください冗談でもやめてください！エレーナが聞いていたら殺される！」

新婚であるアルブレヒトの妻は、アルブレヒトの同僚の王宮魔術師だ。

ちなみに、姉さん女房でもある。10代半ばに見えるが、彼より軽く30歳くらい年上だ。

性格は『苛烈』としか言いようがない。

「そこがかわいいんですよね〜」などとのろけるアルブレヒトに、こいつDMだったのか、と彼がドンびきしたのは、つい最近のことだった。

「話がズれているぞ、誰が引越してくるんだ？」

お前は全く、他人の家に来た目的すら果たせないのか？」

「ズラしたのは先輩でしょう!」

普段は最低限のことしか話さない隠者だが、アルブレヒトにたいしては、むしろ話がずれようがかまわず口数が多くなる。

『隠者』とかっこをつけてはいるが、主に自分の性格の問題で人によく嫌われ、それを全く直す気もないため人付き合いを避けている彼にとつては、珍しく貴重な『友人』なのだ。

彼がそれを認識しているかはともかくだが。

「とにかく・・・まだ隠されていることなのですがアルブレヒトは声を潜めた。

「今、王宮に、『魔女』の賓客がいらつしゃいます。

第一王子が招いた方で、先輩の屋敷の隣の隠されし塔の姿を顕した方なのですが・・・」

「西の魔女か?!」

彼は思わず、大声で叫んだ。

## 第8話

「さすが先輩、もうご存知でしたか」

アルブレヒトが何故か笑顔になる。？

「本当に、西の魔女なのか・・・」

呆然と、しかし、どこか恍惚と。呟いた隠者の言葉に、しかし肩を竦めてアルブレヒトは首を横に振った。

「正確には、私では判別が付きません。

？？　？ただ、私たち、つまり宮廷魔術師の誰よりも優れた方であることは、確かです」

「確かに、お前らよりすごいというだけでは、全く判別がつかんな」

「はつきり言いますねえ

？？　？じゃあ先輩ならわかるっていうんですか？」

「確約はできんな」

アルブレヒトは驚いて目を見開いた。

この、ともすれば誇大妄想とも思われかねないことをいつも言う自信家の彼が、自分の力では無理かもしれないと言ったことももちろんそうだが。

その言葉を、悔しがるところか、どこか少年のような憧憬を、隠してもせずに瞳に浮かべたからだった。

塔の下の土地というのは、彼の屋敷の森側の隣にあたる。例の孤児院も森側の隣に当たるが、塔よりは街よりにある。

ちょうど塔を合わせていびつではあるがそれぞれ小さい四角形の頂点に位置する形だ。ただし、敷地の仕切りの関係で、孤児院もまた新しい魔女の屋敷の隣となっている。

あれから数日。屋敷を作るとはいえ、一から作るわけではなかったらしい。

屋敷の中心となる建物はどこからか運んできたらしく、既に人の住む形は整っている。

驚いたことに宮廷魔術師もほとんどが屋敷の移築なんていうことに駆り出されているらしく、アルブレヒトやエリーナの姿も時々見える。

――宮廷魔術師が使われるということは、王命か。

これは、本当に西の魔女なのかもしれない。

伝説の西の魔女。聞いたことしかない、最も強い力を持ち、彼女にしか使えない真理を持つ魔女。

――本物なのか、それともただの騙りか。

騙りならば必ず見抜いてやる。

本物ならば……。

まるで祭りを待つ子供のように、彼はその日を待っていた。

## 野いちじと蛇いちじ

静けさに満ちていた彼の屋敷の周りは、塔が顕われた日からとつもなく騒がしくなった。

茨の届かない範囲の塔の真下には新しい魔女の屋敷のために駆り出された人たちが溢れている。また、塔が顕れたときから残っている彼の敷地より街に近い部分の露店は、相変わらず賑やかに、塔を見物に来る者たちの相手をしている。

しかし、『眠り姫争奪戦』などと大々的に垂れ幕が出た割には、肝心の眠り姫に対する情報は全くといっていいほどに流れてこなかった。

前にアルブレヒトがぼろりと、しばらくは目覚めないでしょうと言ったため、眠り姫・・もしくは眠っている何かがあたの塔にいることは間違いないと思うのだが。

とにかく、この喧騒がいつになったら終わるのか、そこを知りたいと切に願う隠者だった。

「なんだ？」

急に、彼の意識にひっかかりが生じた。

「また侵入者か」

ため息をついて立ち上がる。

塔が顕れて以来、たまたま知らずに敷地に入り込んでしまう者や、わかっただけで侵入して来る馬鹿者が後をたたない。

ほんの少し立ち入ったくらいならば構わないが、少し前の様に植物園を荒らされてはかなわない。

最近では、低い塀等で敷地の側を覆い、侵入者検知の魔道具を設置

しているのだ。

彼は、歩きながら侵入場所を探った。

「孤児院の側か？」

孤児院の側には、塔の騒動より以前、彼がこの屋敷に来たときから、既に背の高い塀があった。

子供達が間違つて入つてこないようであろう。そして、この2年、実際に迷い込んで来たことはない。

それは、塀の向こうが別の敷地であるということ、孤児院が教育してくれているからでもあるだろうし、その塀が、深く暗い森に入つた部分にあつたからかもしれない。

彼の屋敷は、一人で住むにはあまりにもだだっ広いが、その分仕掛けがなされている。

元々、この屋敷を設計したのも魔術師だったのだろう。

生活空間は狭いが、一人一人が過ごすには十分な設備が揃っており、魔術師の習性としてつつい溜め込んでしまう魔道具や本やガラクタを詰め込むための収納部屋が非常に充実している。

この屋敷を作つた以前の主がどんな人柄かは知らないが、魔術師としての腕はきつとよかつたのだろう、と思わせる屋敷だった。

また、魔法薬を作るための庭も充実していた。薬草園として整理された区画だけではなく、野生のような顔をして生えている草の中にも使えるものが混じっている。

何しろ、森が近いのが良い。

彼がいつもいる部屋からも、すぐに外に出ることができるのだ。

音を立てないように風に魔法で干渉しながら歩を進める。

侵入者のいる場所はすぐにわかつた。

魔法で検知したわけではない。もつと簡単な理由だ。

「やめなさいジル、ここは隣の屋敷の敷地内よ……！」

「大丈夫だよ先生。こんなにいっぱい野いちごがあるなんて。

??？もうこんなに枯れてるし、あの魔術師はこんなもの食べないんだよ。テオたちきつと喜ぶって！」

「ジル、もういいでしょう！というか私を助けて……」

「他人の敷地内で、何やってるんだお前ら」

声をたどればあっさりと侵入者にたどり着く。

彼の声に、タライいっぱいに赤いイチゴを摘んでいる赤毛の少女が振り返り、驚愕の表情で固まった。

そして。

「あなた、ほんとに何やってんだ……？」

その足元、塀の破れた隙間から通ろうとして出られなくなったのだろっか。

濃茶の髪、『院長代理』が、隙間に挟まったまま、下半身を必至で引き抜こうとしていたのだった。

## 第2話

塀の破れた隙間に挟まった女と真つ向から見あつたまま、とりあえず隠者は沈黙した。

正直、あまりにも馬鹿馬鹿しいというか情けないというか。とにかくどこからツッコんだらいいのかわからない。

「あ、あの、こんな状況で申し訳ありません」

先に目を逸らしたのは院長代理だった。

自分の間抜けな姿が恥ずかしいのか、耳まで赤くなる。

「その、何度かご挨拶に伺おうと思つて、賢者様のお屋敷を訪ねたのですが・・・いつもいらっしやらなかったの・・・」

「は？」

何故、この状態でそんな話が出て来るのかわからない。

「この前は、ジルがほんとうにご迷惑をおかけいたしましたで、直接お詫びを申し上げることができず、申し訳ありませんでした。

?? もちろん、賢者様もお気づきとは思いますが、ジルは『見習い』としての伝授は受けています。

?? けれども私たちは・・・」

「いやちょっと待て。待つてくれ。とにかく待て」

彼は、なおも続く院長代理の言葉を遮った。

やっぱりあの少女は正式に伝授を受けた見習いだったのか、とか。

何度も来たのに彼が留守の様に勘違いしたのは彼の屋敷のセキュリティ

テイにひっかつたな、とか。

そもそも今の状況で、何故その時の謝罪からまず入るのか、とか。まあいろいろツツコミたいことはあるが、とりあえずは。

「あんだ、とりあえず、そこに挟まったまま話すのはやめないか・・・？」

「あ・・・っ！まことに無作法で申し訳ありません！！」

いや、無作法とかいうレベルじゃないだろう。

もはや呆れ果てて、押し黙っていると、院長代理は慌てたのか、今の状況を忘れたのか、慌てて頭を下げた。

そしてそのまま地面に顔面をぶつけたのだった。

「先生・・・」

少女の呆れた声が、小さく響いた。

### 第3話

「んー、ジル、痛い・・・胸が、胸がひっかかって・・・」

「先生、胸が大きいから抜けないんだよ、もつと縮めて！」

「ジル、それは無理だと思っの・・・」

ジタバタと動く院長代理と少女を見やり、一体これはなんのコントかと目を丸くしていた隠者は、盛大に溜息をついた。少しばかり笑いたかったのは秘密だ。

「どけ、くそガキ」

「く、くそガキ?!」

彼の暴言に信じられないとばかりに振り返った少女を、塀から引き剥がす。

全く予期していなかった動きに、彼女はたたらを踏み、勢い余って尻餅をついた。

「いたあつ！それにくそガキって何よっ！先生に何かしたら許さないからね!!」

「黙れ、馬鹿ガキ」

ぎゃんぎゃんと騒ぐ少女を背に、院長代理を見下ろす。

髪も顔も泥だらけの女性は、つい先日、彼が気圧されたとは思えない、ただの、普通の、女性だった。

塀に手を触れる。

「c . t - t . 1 2 - c . 1 | f」

(私は穴をあける、そしてそれを12レベルで破壊し、風で吹き散らす)

彼が手を触れた場所から、音もなく穴があき、人間の幅ほどの大きさが虚となった。

崩だったものがさらさらと砂になって崩れ落ちた。

ちらりと横を見ると、少女がわめくのをやめてて、驚いた顔でこちらを見ている。

魔術構成が理解できなかったのだろう。それどころか、彼が何を発音したのかすらわからなかったに違いない。

彼は右頬を軽くあげ、笑った。

そう、見習いごときにわかるはずはない。

発音も構成も、無駄を極限まで省き、彼独自の理論で再構成してあるのだ。

もちろん、その力加減といい、魔力の扱いといい、自分の特性と使用する魔道具の性能を知り尽くした上だ。

一言で言えば、あり得ないくらいの省エネ魔法。

少ない魔道具でも、足りない魔力でも、絶大な魔法を生み出すことができる。

もちろん逆に、針の穴を通すような細かい魔術操作も精密に行える。見習いのみならず、そこから大魔術師と言われているような連中でも、半分もわからないに違いない。

魔術は力押しをすればいいものではない、というのが彼の持論であり、信念であった。

泥まみれの院長代理が、さらに真っ白な粉まみれになる。

ふるふると顔を犬の様に振り、手で顔を拭おうとして、その手も真

っ白なことに気づいたのか、やめた。

自由になった身体を立ち上がらせ、隠者の前にまっすぐ立ち、あの日と同じく、腰を引いて礼の姿勢をとった。

「このようなお見苦しいところを助けていただき、ありがとうございます  
いました。その・・・」

「いや、もうそれはいいから」

――馬鹿の一つ覚えか。

隠者は珍しく、暴言を喉元で飲み込んだ。

その馬鹿の一つ覚えのような立ち姿に気圧された自分を思い出したからだった。

## 第4話

院長代理は、白い粉と泥で、汚れた彫像のようになっていて、長い濃茶の髪もくしゃくしゃになって、ぺたりと垂れていた。

「とりあえず、身なりをなんとかするのが先だな」

相変わらず礼をとったままの院長代理に言う。

「申し訳ありません。そのようです」

頂垂れる院長代理に、隠者は思わず言葉を続けた。

「それから、多分あんたらが玄関だと思っているのは、ダミーだ」

「は？」

院長代理は、首を傾げた。

「本当の玄関は別にある」

彼の家は一見さんお断りなのだ。紹介者がいないと依頼人も通さない。

表に面した門はダミーなのである。そちらから来る人間は、招かれざる客と自動的に判断し、相手をしないことにしている。

正確には、その場所に設置してある魔道具は侵入者防止用のもののみであり、ただの来客の有無は彼に知らせて来ない。

だから、彼は、院長代理の訪問すら知らなかったのだ。

「そうだったのですね……。考えてみたら、あなたほどの魔術師であれば、セキュリティにも気を使っているはずでした。

?? それでは、改めて、ジルと共に伺いしてよろしいでしょうか？」

最低限の躰は受けているらしい。

少女は、院長代理が話している間は、不機嫌な顔はしつつも、院長代理の邪魔をすることも話を遮ることもなく、隠者の後ろで静かにしていた。

しかし、すっかり、隠者を睨みつけるその瞳には、隠しようもなく苛立ちが見える。

「ー全くもって、嫌われたものだな

もちろん、彼もこんな『クソ生意気なガキ』は好きではないが。彼はしばし考え、かぶりを振った。

今日一日だけで、いちごを荒らされ、結果として塀を破られたのだ。自分の家を荒らされる危険性に、彼の神経質な魂は叫び声をあげた。とはいえ、正直、この院長代理にはじっくり話を聞いてみたい気がする。滅多に他人に興味を持たない隠者には珍しく、彼女はと話してみると面白いのではないかという気持ちが膨らんでいた。

何故あの場所で、少女が『見習い』ではないと嘘をついたのか。

おそらく、言葉の端々に見せる知識から、間違いなく魔術師であるだろうに、何の魔力も纏わずに歩いているのか。

そもそも何故こんな若い身空で、孤児院の院長代理をしているのか。間抜けではあるが、彼女からは品位と知性を感じる。おそらく、魔術師としてだけではなく、高い教育を受けているのだろう。

「俺がそちらの孤児院に行こう。

?? 構わないか？」

院長代理は虚をつかれたように顔をあげ、ぶんぶんと頭を縦に振った。



## 第5話

驚きのあまり口を半開きにした院長代理に、警戒心を完全に剥き出しにして怒った猫のように毛を逆立てている少女を満足げに見ながら・・・実は一番驚いているのは彼自身だった。

自分の家に他人を入れるのは大嫌いだ。

だが、他人の、しかも子供だらけの家など、怖気が立つほどさらに嫌いだ。

今の言葉など、普段の彼が聞けば正気ではないと思っただろう。実は言葉を発した瞬間、自分の正気を疑ったほどだった。

「じゃあ、案内してもらえるか？」

それなのに、むしろいつもではあり得ない変化さえ楽しめるような気持ちになっているのは。

・・・もしかしたら、西の魔女の屋敷が毎日のように形になっていく、その高揚感のせいかもしれない。

「それと、そのガキ。いちごは置いていったほうがいいぞ。

??？ それは蛇いちごだ。食えたもんじゃない」

「へ？」

少女は素っ頓狂な声を上げて、抱えたタライを覗き込んだ。

「で、でも・・・」

おろおろと視線を院長代理に向けると、彼女は鎮痛な面持ちでー真っ白だからあまりわからないがー首を横に振った。

少女ががっくりと膝をつく。

「なんで食べられないイチゴなんて植えてるの・・・？」

力なく呟いた彼女に、勝ち誇った顔で彼は言い放った。

「お前は馬鹿か。」

「?? 蛇いちごは様々な薬になるんだ。」

「?? ? 魔術師なら、食べられるか食べられないかなんていうつまらない物差しでは物事を図らんのだ」

がつくりと項垂れた少女に、大人げなく勝利の笑みを浮かべた彼は、しかし、すぐに面白くない顔で院長代理を振り返った。

「あんたも、最初からわかってたんだろう。」

「?? ? さつさと教えてやればこんなことにならなかっただろうに」

彼の指摘に、院長代理は、すました顔で答えた。

「挟まってそれどころではなかったですし、多分、言ってもジルはわからなかったでしょうから、一度痛い目を見た方がいいのではないかと思いましたし」

ほんの少し彼女はいたずらっぽく笑った。

「それに、蛇いちごは虫刺されの薬になりますから。」

「?? ? 小さい子たちが痛いとよく泣くんです」

ちやつかりしてやがる、と隠者も苦笑した。

先ほど、若い身空で何故孤児院の院長代理なんかをやっているのかと不思議に思ったが、この図々しさと肝の据わりっぷりを見るに、実はかなりの『おばちゃん』なのかもしれない。

彼はじろじろと院長代理を見た。

考えてみたら、魔術師の見た目がその年齢を表しているはずがない。実際、彼自身、既に百歳は超えている。

？「その・・・結果的にあなたの庭を荒らしたのは申し訳ないと思っ  
ています」

彼の視線の意味を非難と捉えたのか、再び謝りだした院長代理を目  
で制する。

とにかくここにいても始まらない。

この屋敷に移ってから二年。

隣という立地条件にありながら、一度も足を踏み入れたことのない  
孤児院へ、行くのだ。

少女は、少しばかり迷い、タライを再び抱え直した。食べられなく  
とも使えるとわかったからだろうか。

ちろりと彼の顔を伺う。そのイチゴは彼の庭のものだからだ。

彼は、溜息をついて目を逸らした。

偉そうなことを言ったが実は、その蛇いちごは、前の屋敷の持ち主  
が植えたものであり・・・枯れても省みないほどに、実はそもそも  
存在にさえ気づいていなかったからだ。

## 第6話

隣の家ではあるが、たまに街に買い物に出る場合、孤児院は街とは逆方向になる。

彼の屋敷から、屋敷の庭が見えることはあるが、よっぽどのことがない限り、孤児院の前など通ることはない。

そもそも、あまり気にしたことも、ましてや中に入りたいという興味を持ったこともなかった。

孤児院は、この国によくある赤い屋根と大きな煙突がある、特徴のない建物である。

屋敷というには装飾がなく、ただひたすら実用的に、大勢の人を収容するという目的がはつきりとした、広い空間が続く。

場所が森の横・・・街の中では最も辺鄙な場所だからだろう。屋敷も庭も、非常に広々としたていた。

「先生、この人誰？」

「だれえ？」

「こら！テオ！泥だらけの手で触らない！！」

?? 向こうに行つてなさい！・・・『お客様』なんだから」

そこは、家の中に入るまでもなく、家の外にも泥だらけの子供たちが跳ね回っていた。

怖いもの知らずというか、赤みがかった金髪の子供が泥だらけの手で彼のローブを触ろうとするのを、ジルが慌てて制する。

「子供の数の割には世話人の姿が見えないな」

ジルが子供たちのまとめ役をやっているのを見たことはある。

しかし、子供たちの面倒をみるべき『大人』の姿が見えない。

「私とジルと、あともう一人アマリエという者がいます。」

「?? ?人を雇うには余裕が足りないのです。子供たちはできるだけのことは自分でやれますよ。」

「?? ?卒業生が助けてくれたりもしますし。」

「ここは、国の援助を受けているんだらう?」

この孤児院はそもそも、先の王が先の戦災により生まれた戦災孤児のために建てたものであるはずだ。

彼女は、薄く微笑んだ。

「ええ、ほんの少しだけ」

「.....」

先の戦争は遠くなった。

それに、為政者が変われば、方策も変わるということだらうか。

まわりつこうとする子供たちを引っぺがすようにして、客間に使われているのだらう、奥の部屋へと進む。

花柄の壁はあちこちが汚れてはいたが、荒れた感じは全くない。先ほどからまわりついてくるのは鬱陶しいが、悪質な悪戯をしてくるような子供はいない。見慣れない人に対する人懐こい好奇心で済んでいる。

よく躑けられているのだらう。

院長代理がどこか別の部屋に入り、ジルが客間と思しき部屋の檯机の一席に彼を案内した後、姿を消した。茶でも淹れてくるつもりなのだらうか。

本来であれば、客である彼を放つて置くなどということは無礼の極みであると言えるが、院長代理は泥だらけの服を整えなければならず、ジルはおそらく茶でも淹れにいったのだろう。

さつき話に出たアマリエという職員がいないとすれば、子供たちに彼の相手をさせるわけにもいかない。

仕方のないことと言える。

客間は、少し広く、棚の上は沢山の飾りで溢れていた。もちろん、高価な置物などではない。奇妙な人形や歪んだ焼物など、一見して子供が作ったとわかるような『ガラクタ』が宝物の様に大事に飾られていたのだ。

壁紙はくすみ、普段はほとんど使われていないことがわかる。

たった一つ、テーブルと机だけは、飾り彫りを施した立派で大きな檜机だった。彼の案内された檜机である。

偏見かもしれないが、彼は、孤児院というところはもっと寒々しく効率的な場所かと思っていた。

しかし、ここには紛れもなく、『帰るべき場所』の暖かさがあった。人手が足りない中で、ここを『家』としてきちんと動かしている院長代理を、彼は少し見直した。

「お待たせいたしました」

足音と共に、扉が開かれる。

彼は立ち上がって院長代理を迎え・・・瞠目した。

彼女は、先ほどの飾り気のない普通のワンピース姿ではなかった。

仕立てのよい赤いドレスに、纏うは魔術師の黒いローブ。

華美ではないが繊細な装飾が施された銀色の杖。

髪には、同じく銀の、螺旋を描くデザインのサークレットを着けている。

そして、それらは全て、強力な魔力を纏う、魔道具であることが、すぐにわかった。

「グリードリスの賢者様。

?? 我が院にお越し頂き、ありがとうございます」

礼をとる彼女に、同じく、彼も礼をとった。

「お招きいただき、感謝する。

?? ?アルトウールの魔女殿」

驚きの表情を見せる彼女に、彼はしてやったりと笑った。

「その名前で呼ばれるのは、久しぶりです」

この街の出身であるアルブレヒトに聞くと、すぐに彼女の正体はわかった。

今の若い人はあまり知らないが、年配の人間ならば知っているという。かつてどこの街にでもいた古き魔女・・・それが、彼女なのだということが。

## 第7話

かつて、魔法は、不思議の力だった。

生まれつき強い魔力を持った者が、それを『制御しきれずに』起こしてしまうあり得ない現象、それが魔法だった。

呪文もなく、制御も一人一人の会得した経験による感覚で行うしかない。

もちろん、それほどの魔力を持った者など一握りしかおらず、魔法使いといふのはそんなに数が多い存在ではなかった。

他人が使えない力で、他人のできないことをやってのける彼らは、時には尊敬の対象となり、時には忌まれた。

しかし、1000年ほど前にとある天才が、魔術構成による魔力制御を編み出し、500年ほど前から爆発的に魔術構成が研究されるようになった。

現在では、『普通の人間』が学べば魔法の力を使うことができる様になり、世界は劇的に変化している。

彼らは、生来の魔法使いと自分たちを区別し、『魔術師』と自らを称するようになった。

もちろん、古き魔女や魔法使いの中にも、その新しい技術を学ぶものはいたが、元々の数が少ない。

現在、魔法を使う者は正確にはほとんどが魔術構成を使用する『魔術師』と言ってよい。

また、いくら人間にはありえないほどの魔力を持った古き魔女とはいえ、1000年を越えて生きる者は多くない。彼らの魔力とて限りがあるのだ。

むしろ、計算して自分たちの魔力を魔術構成や魔道具で補える『魔術師』とは違い、望んだ方向に力が使えるとは限らず、寿命を縮める魔法使いも多かったほどだ。

現在では、魔術構成が生まれる以前からの生粋の魔女など、ほとんど化石に近い存在だった。

「どつぞ」

愛想のないジルの声とともに、紅茶が目の前に置かれる。

目の前、危な気のない手つきで、意外にも礼儀正しくお茶の準備を終えると、ジルは魔女の横に座った。

挨拶が一通り終わる。ジルが不承不承ながらに謝った。

彼女自身、自分の行動が悪かったことはわかっているのだろう。しかし、人前で殴られた恨みは深いらしい。

基本的に、小娘に嫌われようが何をしようが彼には何の関係もないとはいえ、たまに睨んでくる彼女に対し、顔に出すことはしないが、全く持つて気分は良くない。

次、何か彼の前でミスをしたら、厳しく躰けてやるとかたく心に決める。

それよりも今は、目の前の魔女だ。土地の名で、しかも森の名で呼ばれるほどの古き魔女と対面するのは、実に久し振りのことだった。

「そつえば、貴女は『院長代理』とのことだが、『院長』はいらつしやらないのか？」

ふと思いついた疑問を口に出す。魔女の顔がわずかに曇った。

「院長は、病気で療養中なのです」

ジルもわずかに下を向く。

「この孤児院は、元は彼女がはじめたものだったのですよ。  
私もまた、彼女に拾われたようなものです」

## 第8話

「拾われた？」

彼の質問に、しかし、魔女は答えずに曖昧に微笑んだ。

自分から話を振っておきながらばかす、そんな思わせぶりな話し方は好きではない。

彼は多少鼻白んだが、相手は古き魔女だ。

言わないと決めたのなら言わないだろうし、言いたいならそのうち言うだろう。

相手の駆け引きに乗るのは好きではない。彼は話題をズラした。

「院長殿も魔女なのか？」

彼の問いに、魔女は頭を横に振った。

「彼女は、この国の王女です」

「王女……」

彼も、この国に住むと決めたときに、この国のことはかなり調べている。

確か、今の王には王子が二人いて、養女である王女が一人いたはずだ。

「ドロテア様か？」

しかし、ドロテア様がご病気という話は聞かないが……」

それどころか、ドロテア姫はまだ二十歳にもなっていないはずではなかったか。

彼は首を傾げた。

クスリと目の前の魔女が笑う。

「院長は、今の王ではなく、先々代の王の王女なのです。」

先代の王は今の王の叔父に当たり、先々代の王は先代の王の従兄弟に当たりますので……」

近年、この国の王位継承がややこしいことになっていったことは知っていた。

が、正直、どうでもいい。

「よくわかった」

正直、めんどくさいので全然わかっていないのだが、現在の王と縁が遠い王女であることはよくわかった。  
孤児院の経費が削減されるわけである。

彼は、目の前の『院長代理』を見た。

実は、目の前の院長代理を『アルトウールの魔女』と『見抜いた』のは半分はハツタリである。

アルブレヒトは、実は少し違うことを言っていた。噂では、孤児院の『院長』の方が魔女らしいと囁かれていたのだ。

そう。あの時、院長代理が、銀の杖を持って現れなければ、彼も気づかなかっただろう。

ジルは、未熟だが魔術構成を組んだ。つまり、彼女に魔術を教えた者は魔術師だ。

彼は、てっきり院長がアルトウールの魔女であり、院長代理が若い魔術師だと思っていたのだ。

あの銀の杖を見るまでは、いや、その纏う古き魔法を感じるまでは。

「では貴女に聞くが、あの時、何故、その小娘が、伝授を受けた魔

術師であるということを知った？

それに、貴女自身も魔女であることをどうやら隠しているよ  
うだが・・・理由はなんだ？」

魔女は、薄く微笑んだ。

「地域に受け入れられ、たくさんの人に支えられて、この孤児院は  
なんとか運営されています。」

目立つのは、いいことはありません。必要以上に警戒さ  
れます。

魔術師が上流階級であると思込み、敵視する人はまだ  
多いのです。そうでなくても、自分たちに理解できない力は怖が  
れる。

ここでささやかに生きていくためには、仰々しい名前は不  
要なのです。

彼女はただのジルでいい。私も、アルトゥールの魔女と呼  
ばれたのは、もう50年以上も前のことではない・・・」

しかし、魔女の噂は消せず、せめて人前に出ることのない院長にす  
り替えたのか。

彼女のしたことが、その考え方が正しいのか、彼には判断できない。  
しかし、目の前の院長代理は、固い意思を持っているようだった。

## 第9話

目の前の古き魔女の人生に、興味がないかと問われれば、珍しく、興味があると言えるだろう。

しかし、必要以上に立ち入った話を聞く気はなかった。

それより、気になること。

それは

「魔女殿。あなたは魔術構文も使うのだな」

この50年で発達した新しい技術。

人間は、今までの自分を中々変えられない。特に古き魔法使いたちは年も経ており、自分のやり方が確立している者も多い。今更変えようとならない者が大半だった。

魔女は、嬉しそうに笑った。

「ええ。知り合いが、とても熱心に教えてくれたのです。

私には使いこなせない知識もたくさんあったのですが……。

それでも教えてくれる彼らが楽しそうだったので」

「ほう」

隠者の目も輝いた。

それでは、もしかしたら、この魔女は、黎明期の頃の、名だたる魔術師たちと知り合いだったのか。

「その、知り合いの方々は誰です？」

おそらく、その時の彼は、よだれでもたらしそうな顔をしていたのだろう。

今までしおらしげにしていた魔女は、一瞬驚いた顔をした後、それまでのしおらしさとは全く違う表情で、にやりと笑った。

「青のザームエルが、友人でしたので……」

「ザームエル?!」  
ジルが思わずビクリと身体をはねさせるほどの大声で、思わず隠者は叫んだ。

100年前、魔術構文を『学問』として飛躍的に発展させるきっかけとなったのが、大天才、ザームエル・ニヒトヴァイスだ。

彼の開発した魔術構文や、魔法についての分析は、大革命を起こした。

現在では、さらに研究が進んでいる。しかし、彼の存在は、魔術がある限り、始祖としてその名を轟かせ続けるだろう。

隠者さえ、彼の論文そのものを見たことはない。

彼の論文は、財宝よりも高価なものとして扱われ、写本すらなかなか手に入ることもないのだ。

「か、彼から、直接に……」

あまりにも想像を超える事実には、眩暈すらした。  
そんな彼を見て、魔女は、さらなる爆弾を落とす。

「ええ。書きかけの論文や、出来上がった本も、たくさん貰いました」

絶句した彼を見つめる魔女の笑顔は、既にその言葉がどのような意味を彼に与えるのか、知っているのだろう。

「な、な、な……」

世の中に出ていない。書きかけの論文。

「どうして……」

喘ぐように言葉を発した隠者に、魔女は、笑みを深くして答えた。

「もとは、森の家に。今は・・・この、孤児院に」

## 真名と本名

今から思えば、あの魔女が、自分の庭に張り巡らされていた侵入者の結果に気付かなかったわけがない。

とにかく、自分の意思を通すために、彼に会う必要があったのだろう。隠者が書痴であり、知識を得ることに貪欲であるなどということとは、すぐにわかっただろう。

ザームエル・ニヒトヴァイスの手書き論文などという餌を出せば、食いついてくると最初からわかっている、『謝罪』という名目で、彼を交渉に引き込んだのだ。

そうとしか思えない。

腹はたつが、しかし、そういう駆け引きは、実は嫌いではない。

自分を出し抜けるものなら、鮮やかに出し抜いて見るがよい、と自信家の隠者は常に思っている。

風そよぐ初夏。

魔女から借りた論文を読む、その息抜きに、自分の部屋から窓の外を見る。

そこには、孤児院の子供達が干した、大量の洗濯物が翻っていた。

それは、論文を見せる代わりに、魔女が呈示した交換条件だった。

孤児院は、もとは日当たりのよい立地だったのだが、洗濯場の位置が悪かったため、眠り姫の塔に遮られて、一日中陽が届かなくなってしまったのだという。

自分の屋敷内に人を入れるのは、何があっても、絶対に、嫌で嫌で嫌だったのだが、論文の価値には代えられない。

かなり渋ってみせたが、答えは既に出ているも同然だった。最初から彼の完敗だった。

金だろうが、財宝だろうが、世の中は、人の欲しがる貴重なものを持っていて人間に、有利になっているのだ。

こうして、彼の屋敷の庭の一部は、孤児院の洗濯場として解放されることとなった。

それにしてもまったく、あの塔を隠すためだけに、辺りの自然条件までも『塔がない』という『条件で存在』させてしまうその魔法は、考えられないほどに凄まじく、正直に言えばどのようによったのか理解できないほどのものである。

その、眠り姫の塔が姿を現して、数ヶ月がたつ。

その後、塔はいまだに観光地のままである。姫が目覚めるのは一年後であると、国から正式に発表があった。

現在は、その姫を目覚めさせる『相手』を選ぶための『選考会』が華々しく行われているのだという。

公開された姫の絵姿　本物かはわからないが　の美しさもさりながら、小さいが貴重な鉱物の採れるこの国との縁を結べ、さらに物語の英雄となれるであろうその地位は、各国の王子や貴族・騎士たちにとっては、とてつもなく魅力的な役割に違いない。

様々な思惑も絡んで、この国のあちこちで臭い匂いがしていた。

「ん？・・・あれは？」

いつのまにか、窓の下の人数が増えている。

洗濯物を干している子供達の世話役、赤い髪の少女に声をかけているのは、金髪碧眼・姿かたちだけは『夢の王子様（プリンス・チャ

「ミング」の、良く知った魔術師、アルブレヒトだった。突如笑い転げる彼を見て、隠者は盛大に顔をしかめる。急ぎながらも論文は丁寧に机の上に置き、部屋に響き渡るような音で扉を閉めると、足音も荒々しく階下へと降りていった。

「笑うな、アルブレヒト」

笑い上戸の後輩は、ひいひいと言葉にならない音を腹から出しながらうづくまっていた。

「誰、これ？」

異様な笑い方に思わず引いたのか、距離をとって言葉を発するジルを、隠者はじろりと睨んだ。

「お前、目上になんて言葉を使うんだ。『コレはどなたですか？』と言え」

「せんばあい、『コレ』呼ばわりはそのままでですか?!」  
情けない声をあげたアルブレヒトは、しかし、にやりと笑った。

「いやあ、前々から聞いていたけど、あの先輩が、あの先輩が！孤児院を援助しているというのは本当だったんですねえ。

で、噂どおり、『院長代理』はいい女なんですか？」

静かに身をかめると、隠者は誰にも聞こえないよう、アルブレヒトの耳元で囁いた。

「黙れ、フェモイルfeel-moil」

「はぐあっ！」

耳元で真名を囁かれ、アルブレヒトが地面に倒れて悶絶した。満足した顔でアルブレヒトから離れ、隠者はさらにトドメの一言を発した。

「他の女に興味を持ったとエレーナに言うぞ」

「やめて、先輩やめて、やめて……」

真名を呼ばれたのがこたえたのか、それとも最愛で最恐の妻の名前を出されたからか。

アルブレヒトはうわごとのように眩きながらガタガタと震え続けた。  
いた。

「ちょっと、相変わらずやり方が乱暴だよ！」

「お前は相変わらず口の効き方を覚えないな」

ゆらり、と肩を掴み、同じく顔を寄せてくる隠者に、ジルはひい、と口の中だけで悲鳴をあげた。

先ほど、アルブレヒトにしたのと同じく、耳元に口を寄せる。

「たまには学習したらどうだ……ジルフェル j i i l - f e e l

せつかく、由緒正しい、いい真名をもらったというのに」

囁かれた瞬間、ジルは体中に激痛でも走ったかのようにびくりと硬直した。

手に持ったシーツを取り落とすと、そのまま膝をつき、自分の身体を抱えてガタガタと震えだす。

「子供にも容赦ないんすね」

少し立ち直ったらしいアルブレヒトが、青い顔のまま、しかしにやりと笑う。

「ねえ、ハンス先輩」

弾かれたようにジルは顔をあげた。隠者を見るが、特に変わった様子はない。

どうやら、『ハンス』が真名であった、というわけではなさそうだ。しかし、隠者は、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「・・・本名？」

「悪いか？」

いつそ開き直ったように、隠者は吐き捨てる。

悪くはない。悪くはない。よくある名前である。

むしろ、よくあり過ぎる名前である。

村に10人男がいれば、3人はハンスだろう。

日本と言えば「太郎」だの「一郎」だのに近い、没個性的な名前。それが、「ハンス」であった。

「ああ、あんた、つまりカツコ悪いから自分の名前呼ばせたくない」

「お前ら黙れ！！！」

『歴史に残る大魔術師』に『ハンス』は恥ずかしい。などという自己意識過剰な理由から名前を隠していたのだとすぐにわかったジルの、嘲るような笑みに、隠者　ハンスは、顔を真っ赤にして怒鳴った。

## 第2話

そんな彼を見て、アルブレヒトは、大声で笑った。

本人は気付いていないようだが、先輩は、少し変わった。

どんな理由があれ、他人を自分の領域に入れなかった彼が、こんな風に打ち解けて他人と接している。

自分だけが特別だった分、少し残念だが、それは、彼にとって、大きな隙になるだろう。

本当に、面白くなってきた。

丸くなった『隠者』がどのように変わっていくのか。

隙もなく、知識に耽溺し、まるで他人を省みない。そんな彼の変貌に興味がある。

そんな彼を手玉にとり、論文というお宝をエサにしつつ、意を通した『院長代理』にも興味がある。

なにより、今後、彼らの動きを知っておく必要が、アルブレヒトにはある

大笑いしたジルを物理的にシメた後、こほん、と咳払いをして、ハンスは二人を睨んだ。

「ふん、そもそも、お前らの魔術構文は未熟すぎる。

自分の真名を垂れ流して恐くないのか？」

「いやいやいや、他人の魔術構文を『読んだ』だけで真名を掴めるなんて離れ業は、普通、できませんよ・・・」

ジルもぶんぶんと頭を縦に振る。

魔法使い・魔術師にとって、自らの力の源とも言えるものが『真名』だ。

そのまま身一つで魔力を使える『古き魔法使い』にはもともあるものである。

魔術師は、それを『伝授』によつて人為的に作る。魔力の少ない人間が、魔術を行使するため、世界の魔力と直接繋がるための『機関』が『真名』であり、魔術師としての『伝授』を受けることで、はじめて得られるのだ。

魔術師にとって、真名を掴まれるということは、心臓を掴まれることと等しい。力の差によつては、操られることすらある。だから、魔力行使の際に、真名を隠すことは、一番最初に習う、一番重要なことだ。

それを見破ることなど、普通の魔術師にはできない。アルブレヒトが知る限り、ハンスくらいにしかできない。

「先輩は大天才なんですから、他の人と自分を同じだと考えないでください」

ため息をつきつつ言うアルブレヒトを、ハンスは睨んだ。

「いつも言っていることだが、俺とお前の差を『才能』で片付けているうちは、お前にそれ以上の成長はないぞ」

「いつも言っていることですけど、私は別に『この程度』でいいんですよ」

『魔術』に関する捉え方が、二人では違う。

ハンスにとっては、他の全てを捨ててでも　いや、捨てるという感覚すらないほどに耽溺している一生をかけるべき学問でも、アルブレヒトにとっては、人生を楽しく生きるための道具でしかないのだ。

「まあ、いいや。今日の用事は魔術談義じゃないんですよ。」

「後輩からの心遣いの情報です」

含みのある発言に、ハンスは眉をしかめた。

アルブレヒトがこういう言い方をするときには、ろくなことがない。

「後でジルちゃん孤児院にも行く予定だけど、新しくできた屋敷に、もうすぐ人が入るんですよ。」

「だから先輩　挨拶に『行って』ください」

「俺に、挨拶に『行け』と」

「はい」

生きていくためには、国に睨まれることは得策ではない。

だが、ハンスは、この国に仕える者ではない。

例えば、王宮の庇護を受けているとはいえ、もし、本当に西の魔女だったとしても、同じ魔術師・魔法使いであるならば、究極のところは対等だ。わざわざアルブレヒトが釘を刺しに来ることもないだろう。

ならば。

「西の魔女、一人が来るわけではないんだな」

「・・・『茨の魔女』殿です」

「名前は、おっしゃらないのか」

「私が知らないだけかもしれないませんが・・・そうです」

どうやら、『西の魔女』と言われていた正体不明な魔女は『茨の魔女』と呼ばれることとなったらしい。

真名はもちろんのことだが、基本的に魔法を操る者たちは二つ名で呼ばれることを好み、あまり本名を他人に知らせることはない。

これは、魔法使いたちの時代からの慣わしである。

魔法使いたちは、尊敬されることもあるが、忌まれることも多かった。また、生まれつきであり、遺伝するとも限らない『魔力』を持

つた者が、身分を区別することなく、ランダムに生まれでた。

身分の低い者は身分を隠すため、身分の高い者は逆に血族に累を及ぼさないため。様々な理由が絡み合い、『魔法使いは名を隠すものだ』という『常識』がこの世の中にはある。

もつとも、最近の『真名』を持ち、身分を隠す必要のない『若い』魔術師たちの間では、そんなタブーもずいぶん薄くなってきている。

例えば、自らの生まれた地で自らの王に仕えるアルブレヒトなどは、堂々と自分の本名も身分も晒している。

ハンス自身も、自分の名前ではなく二つ名で呼ばれることを望むのは、単に『ハンス』がカッコ悪いという感覚だからでしかない。

名前をかたくなに隠しているのは、『古き魔女』の作法が、それとも『古き魔女』のフリをしているのか……。なんともきな臭い。ハンスはにやりと笑った。

「先輩の問いにはお答えできませんが、もちろん、魔女殿お一人でいらっしやるわけではありません」  
ハンスの笑いを受け、アルブレヒトはすました顔で言い放った。

どうやら、あの屋敷には、人には言えない『王族絡み』の人間が来るというところのようだった。

### 第3話

こつん、と窓ガラスが音を立てた。

朝早く。日が昇るか昇らないかの時間。ハンスの窓を、何かを包んだ小さな丸い布が規則正しく三度叩いた。

ハンスは、窓を開け、人影に向かって声を張り上げた。

「そんなことしなくても境界線に入った時点でわかってるぞ」  
院長代理も、声を張り上げる。

「だって全然来ないじゃない」

「こつちにも準備つてものがあるんだ。少し待てよ」

「普通、支度に時間がかかるのは女の方じゃないの・・・？」

「黙れ魔女。遭難してもいいなら勝手に行け」

彼女の名前は、未だわからない。古き魔女の習慣で名前を他人に教えないのだろう。

それでもどうしても名乗らなければならぬときには『ヴェスタ』  
という偽名を名乗るらしい。

誰にでも偽名と言ってから名乗るのだから、まったく人をバカにしている。

なんとなく悔しいので、ハンスは彼女をヴェスタとは呼ばない。

支度を終え、魔法のランプを掲げて庭に下りる。

まだ薄暗い時間に森に入るのだ。灯りがなければ危険極まりない。

「きゃあ！」

思ったそばから魔女が悲鳴をあげる。木の根に足をとられたらしい。

「気をつけるよ」

彼女は木に抱きつく格好でなんとか体を支えたらしく、こくこくと頷いた。

この時期、森の中ほどに光るキノコが生えるのだ。その光る胞子は、いわゆる『光る魔道具』の中でも最高級品に使われる。

研究してもよし、売っても高い優れものである。

「そういえば、明日、とうとう隣の屋敷に人が入るようだな」

何気ない風に話を振ると、魔女は、ちらりとこちらを見て、何故か無表情で頷いた。

「大変だわ」

「何がだ？」

西の魔女かもしれない『茨の魔女』に会えることで、すっかり浮かれているハンスとは逆に、魔女は深いため息をついた。

「あなたも知っているだろうけど・・・王室に関係のある方々がお忍びで隣に来るみたいなの。

ものものしい雰囲気の子供達もすっかり萎縮してしまってるのよ。

それにもし、子供達が何か、都合の悪いことを見てしまったら・・・」

魔女は、ため息をついた。

「本当に、迷惑だわ。なるべく関わりたくない」

表情を曇らせる魔女を、ハンスは軽蔑も露わに見下ろした。

この古き魔女は、ただ年齢を重ねていただけではなく、貴重な知識と確かな知性を併せ持っている。

彼の知らない知識が手に入る上に、この数ヶ月で、魔術理論にも多少は物足りないながらついてくることのできる貴重な話し相手になっていた。

しかし、彼女は、その生き方が保守的に過ぎるのだ。  
そこがつまらない。

魔術師たるもの、常に新たな『何か』を追い求めるべきであり、決して好奇心を失ってはならない。

だから、家庭とか、守るべきものとか、そういう言い訳で向上心を失うやつは嫌いなのだ。

未知のものは飛び込むべき。

嫌なものには逆らうべき。

ただ傲慢に、知識だけを求め、そのためならば死んでも構わない・  
・それこそが魔術師の生きる道だと、ハンスは思っている。

「あれ、何かしら」

ハンスの思考を、魔女が遮った。

目の前にぼんやり見える光の塊の中に。

何かが横たわっていた。

## 第4話

光がぼうつと真っ直ぐ浮かび上がる。

細い糸を依り集めたような菌糸の海の上。

赤黒い血にまみれた男が、既にこときれて横たわっていた。

王国の紋章があしらわれた柄を握りしめ、鈍く光る白銀の鎧を来た男は、まず、間違いなく王国の騎士であろう。

喉笛と胸からの多量の出血が死因だろうか。

暗いためよくわからないが刃物傷ではない。首が半分ないようにも見える。

食い破られたような跡だ。

「獣？いや、こんな森の浅い場所に、人を食う獣がいるとは聞いたことがない……」

ぞくり、と背筋を慄きが駆け上がる。

もし、騎士を食い殺した獣がいるのならば、まだ『現場』の近くに  
いるかもしれないのだ。

「人を、呼ぶべき、でしょうか」

固い声で、魔女が言う。

さすがは古き魔女。そこらの若い箱入りと違い、凄惨な死体を見ても悲鳴をあげることも震えることもない。

ハンスは、少し怯えた自分を悔しく思った。

「そうだな。……昨日から茨の魔女の屋敷に騎士が数人詰めている。」

「ちようどよかったと言うべきか」

言葉を切り、ハンスは唇を歪めた。

「・・・だからこそ、というべきか」

ふと、懐かしい匂いがした。

それが何かはわからないが、確かに知っていて、そして、この場には全く相応しくない匂いだった。

魔女は、沈痛な面持ちで、小さく首を振り、安堵したように呟いた。

「・・・子供達が見つけなくて、よかった」

そのことに関しては、ハンスも同意だった。

魔術師と魔女ならば、何かが襲ってきてもある程度はなんとかなるだろうが、子供では犠牲者が増えた可能性がある。

「・・・鎧をつけた騎士を運ぶのは難しそうですね。

私がここにいますので、人を呼んでみてください。きっとあなたの方が早い」

ふと、その言い方に何か引っかかるが、今はそれどころではない。

「ああ、わかった。

あなたなら大丈夫だろうが、警戒は怠るなよ」

「はい」

固い表情で頷く魔女に、ふと思いつき、ハンスは言葉を続けた。

「あなたの言う通りだな。

心配性過ぎると思ったんだが、確かに早速『やつかいなこ』が起きた。・・・こういうのには、お互いできれば関わりたくないな」

きよとん、とした顔をした魔女を残し、ハンスは踵を返して走り出した。

騎士の死体は秘密裡に処理された。

ハンスも、魔術師であるせいだろう、最初は騎士達に胡乱な目で見られ、疑われた。

獣を召喚して操り人を殺す、ということとは、ハンス個人としては好きではないが、不可能ではないからだ。

もっとも、そこはコネーつまりすっ飛んで来たアルブレヒトの取りなしーでなんとかなった。

まだ少し疑われている気がするが、正直、知ったことではない。

ちなみに、院長代理である魔女は、疑われずらなかった。

彼女が魔女であることを知る人はいない。ハンスは魔女の正体を誰にも言っていないため、アルブレヒトも知らない。

また、何より普段の評判がものを言ったらしい。

同じ立場なのにズルい気がしたが、それは立ち位置の違いというやつであり、仕方が無いとも言える。

街の側で人食い獣が現れたなどと噂が立てばパニックになりかねない。

何より、屋敷に『誰か』が入る前日だ。

スキャンダル醜聞は極力避けるべきということだろう。

公表するにせよ、もう少し事情がわかってからということになりそうだった。

——そして、『茨の魔女』が来る日を迎える。  
嵐の予感を、十分に纏いながら——

## 第5話

夜更け。すっかり闇の中に沈んだ森をぼんやりと見つめる。ハンスは昼間も同じようにこの窓から外を見ていた。自分の屋敷から、隣の茨の魔女の屋敷の周りで蠢く人々を。運び込まれる品々を。

「何事もなかったかのように、人が入るんだな」

死んだ騎士の家族にはどう言ったのだろうか。

いや、そもそも、あんな近くに人食い獣が出るかもしれない場所に、茨の魔女はともかく・・・王族に関係する『誰か』の安全は構わないのだろうか。

それとも、魔女だけが来るのだろうか。

夜に篝火を焚いている、その光がチラチラと目に映る。

ものものしい警備とはいえ、その性質は要人警備のものでしかない。

――それとももしかして、騎士を殺したものが何か既にわかっている？

隣の孤児院は、茨の魔女の屋敷とは逆に、静まり返っていた。

昼間、院の外に子供達の姿が見えなかったのは、昨日のことを警戒しているのか、それとも茨の魔女の屋敷の人達と余計な問題が起きないようになっているのか。

――そう、後から考えると、魔女の様子もおかしかった

もしかして、余所者の自分が知らないだけで、この森ではよくあることだったりするのだろうか？

一人食われれば、しばらくは大丈夫・・・とか、そういう言い伝えがあるとか？

いや、それならばアルブレヒトが何も言わないのがおかしい。昼間、すっ飛んで来たアルブレヒトは、ハンスの疑惑を晴らすと、ハンスが何か聞こうとするのを振り切って帰って行った。

何か事情を知っているのか？  
それともただ忙しかっただけか？

判別は難しい。例えば、もし時間があつたとしても、アルブレヒトがハンスを慰めるとは思えない。  
いや、とんでもないクジを引いてしまったことくらいはからかいそ  
うな気がするが・・・。

「わからん」

考えてもわからないことを考えるのは無駄だ。そして、考えてもわからないことは嫌いだ。

「不快だな」

呟いて、ふと気付く。

そういえば、本来の目的であつた光るキノコを採ってくることを忘れたということに。

正直、かなり迷う。

人食い獣がいるとしたら、森に分け入るのは全く得策ではない。

「諦めるか・・・」

最近ではあり得ないくらいに人と話すようになったが独

り言癖は、やはり治らない。  
一人で言っつて、一人で頷いた。

その時。

森の向こうが、確かに、歪んだ。

物理的な歪みではない。間違いなく、魔術的な歪みである。

目の前が閉じていくような、気が遠くなるような感覚に襲われる。

それは、間違いなく、「結界」の魔法。何かを誰かが、隠そうとしている。

——この森で、一体何が起こっている……？

彼は、思わず部屋を飛び出した。人食い獣のことなど、もうすっかり頭から飛んでいる。

ただ、その目の前で起こっている現象を読み解きたい……その欲望で頭がいっぱいになっていた。

暗い森を抜け、必死に魔法の揺らぎを読む。

信じられないほど緻密なそれは、ある一定の場所を薄く何度も覆うように、露われては閉じていく。

これは、人間の魔法なのか？

そう疑問に思うほど、あまりにも圧倒的な魔力の檻が森の中に作られようとしていた。

きつと、その檻が完成し、閉じられたら、彼ですら気づかないであろう。

西の魔女。アルブレヒトが気にするような、王国ゆかりの人間が『わざわざ』こんな辺鄙な屋敷に住み着くこと。騎士の不審な死。それら全てが、秘密裏に進められていること。

何が起こっている。何が起こっているのか知りたい！！

彼は手を伸ばした。いや、正確にはそれは比喩である。まるで手を伸ばすように、閉じていく魔法に触れ、こじあげた

## 第6話

感じたのは、奈落だった。

崖から落ち行く感覚。地面もなく、真つ暗闇をひたすら落ちていく、その絶望感。

人間の魔力であれば、限りがあるはずだ。特にハンスは人の魔力を読むことに長けている。相手が普通の魔術師であれば、その真名を一度で読むことすら可能であるほどに。

しかし、この魔力の塊・・・いや、場自体を覆うほどの魔力を読むことも、捕らえることもできない。

どこまでも、果てしのない、そして吐き気がするほどおぞましい闇が、ぬたり、ぬたりと押し寄せる。

聞いたこともないが、この森ではもしかして、人間の力を超えた現象が起こるのか・・・？

彼は疑問を抱いた。

魔力とは、その者の精神世界を通じてこの世界に具現する。

本人そのものなのだ。

人間が、いや、魔物でも同じだが、意思ある者が、こんな圧倒的でおぞましい闇を抱えられるなど、考えられない。

いや、考えたくないのかもしれない。

足元に、黒い波が押し寄せる様な非現実感の中、ふと我に返る。

このままでは世界との境界が曖昧になる。

まずい。自分が食われる。

膨大で、おぞましい魔力に侵食される・・・！！

しかし、脚がまるで石になったかの様に動かない。  
逃げることも、抵抗することもできない。

――冗談じゃない。

死んでたまるか！！

まだ、見ていない論文がある。知らないことがある。何より、こんな謎を目の前にして、人生を終わるなど、冗談ではない。  
しかし、体は動かない。

彼が、死の予感に身体中を慄かせた、その時。

確かに何者かの意識を感じた。

もし、この魔力が天災であれば、ありえない、『意思』の揺らぎを。

目の前まで押し寄せていた魔力が、まるで戸惑う様に止まる。

瞬間、目の前が開けた。暗い森の中。魔力の奔流が解け、結界の中身がぼんやりと露わになる。

一筋の光が当たりを淡く照らし。

その中に。一人の女性が見えた。

金の紙と青い瞳。黒いヴェールに黒い服。まるで喪に服しているかのようないでたちのその女は。

その、何の感情も移さないような青い瞳で。  
彼を見た。

彼の記憶は、そこで途切れた。

幼い頃は、体が弱かった。

大人になれずに、死ぬのだと、誰もが思っていた。

商売人だった両親に愛されなかったとは思わない。

しかし、彼らは生きていくために家業を盛り立てる必要があり、早々に後継者から脱落した彼ではなく、その健康な弟を後継者として鍛える必要があった。

毎日、一人で、ベッドの上でただ、本を読み、空想をはせる。

自由に行くことのできない部屋の外には何があるのだろうか。

きつと一生見る事のないこの世界には何があるのだろうか。

ただ、そんなことだけを、一日中考え続けた

死にたくなかったけど、諦めていた。

ただ、せめて知りたいと思った。

空が青い理由。

風が涼しい理由。

例えば、自分だけが、大人になる前に死ななければならぬとしても、ただ、命ある限り、知りたかった……。

一人でいると忘れているのに。

何故か、他人がいると、昔を思い出す。

大勢の中で、ただ一人でいる孤独を、思い出すのだろう。

耳元で声が聞こえる。うるさい、頭に響く声だ。

「先生！先生！こいつ、目が覚めたみたいだよ！」

意識が浮上すると共に、胃の腑から吐き気がこみ上げた。それをこらえようと体を曲げると、信じられないほどの激痛が、彼の頭を襲った。

バタバタとけたたましい足音がして、魔女が飛び込んでくる。

「大丈夫？何も無い?!」

妙なことを聞く、と思ったのも一瞬である。

声を出そうとした瞬間、体中を正体不明の激痛が襲い、ハンスは再び気を失った。

## 第7話

ハンスは、まる一日寝ていたらしい。

「驚いたわ。また森の中で倒れてるんだもの」

「よく、俺を見つけたな」

助けられてありがたいというより、むしろ不審な目で、ハンスは魔女をみた。

何故彼女が、自分を見つけることができたのか・・・彼女も、あの閉じていく、現象とも言うべき魔力の本流に気づいたのか。

しかし、魔女は、なぜか少し恥じるように目を伏せた。

「キノコ・・・」

「は？」

「その、結局あの騒ぎで、キノコを採れなかったから・・・」

ハンスは思いもかけない魔女の言葉に、驚いて彼女をまじまじと見た。魔女は、それをどうとらえたのか、真っ赤になって言葉を続ける。

「いや、その、意地汚いって思わないで。だって、前にも言ったで

しょ、やっぱり孤児院の運営もそこそこ苦しいのよ。だから・・・」

「いや、もういい」

ハンスはにべもなく話をさえぎった

「で、キノコは採れたのか？」

「あなたを見つけるまでに少し」

「・・・そうか」

彼自身も、キノコのことは考えたから、彼女が同じことを考えて森にいたとしても不思議ではない。

しかし、あまりにもタイミングよすぎて、どうにも疑わしい。

本当かもしれないが嘘かもしれない。

どちらにせよ、この女がその理由で押し通すつもりなのはわかった。

天井を見上げる。

質素だが、ゆとりのある部屋にベッドが一つ。間違いなく個人の部屋ではなく、客間だろう。

造形ではなく、単なる失敗だろう。アンバランスに歪んだ花瓶に花を生けている魔女の後姿に向かって声をかける。

86

この孤児院は、現王家とは縁が薄いとはいえ、王女が院長をしている。王家との縁はまだ続いているのだ。だから、何か知っているかもしれない。

「なああんた、そういえば知ってるか」

「何を？」

「隣の『大きな屋敷』の魔女のことだ」

『大きな屋敷』というのは、孤児院の子供たちが言い出した呼び方である。孤児院よりもハンスの家よりも大きいから『隣の大きな屋敷』。わかりやすいが、実に安直である。

「そうやら、魔女だけには、王家と関係のある人間も来るようだと聞いたんだが」

びっくり、と魔女の肩が震えた。

「誰か知っているか」

魔女は、振り向いて、言葉を続けようとした。  
そのとき。

「ヴェスタ！大変！」

突然、部屋の扉が開き、見たことのない女性が飛び込んできた。亜麻色の長い髪をした、海のように煌く印象的な瞳。何より、思わず息を呑むほどに美しい少女だ。

街を歩けば、ほとんどの人が振り返りそうな美貌である。

魔女と似たデザインの質素なワンピースと、ジルと同じような飾りのない赤いチエックのエプロンをつけている。

もしかして、彼女が、もう一人いるという職員のアマリエだろうか。

彼女は、ハンスのベッドの前で優雅にお辞儀をし、すぐに魔女に向き合った。

「隣の・・・『大きな屋敷』から、ドロテア様が、『茨の魔女』と名乗る方と一緒にいらっしやいました」

「ドロテア姫?!」

ハンスが驚きの声をあげると共に、姫の来訪を告げる先触れの声が玄関から響いた。

王女ドロテア。

彼女は王家と縁戚関係にあった海の国アントピリテ最後の王女であ

り、現在は王妃アドルフイーネの養女となっている、たった一人の『王女』だ。

アンピトリテ地方が、平和なまま現在王国の一部になっているのは、ドロテア姫以外の王族が文字通り全滅し、一人では国を治められなくなったドロテアがエルツヘンを頼ったからだ。

エルツヘンは彼女を王国の王女として、また、アントピリテを治める女伯としてむかえた。

つまり、アントピリテが、現在エルツヘンへに平和的に併合されているのは、ドロテアがいるからである。

もともと海を持たないエルツヘンにとっては、アントピリテは悲願の海への道である。

その道を自分から差し出している、この国に身を寄せているドロテアの地位は非常に重要だ。

そんなドロテアが注目されているのは、もう一つ。妙齡の独身女性であることだ。

エルツヘンには二人の王子がいるが、3日しか生まれ日が変わらず、母親は双方ともに王妃ではない別の女性である。そして、二人とも母が違う。まるで争ってくれと言わんばかりの存在だ。

次の王は、今のところは第一王子のベネディクトに決まっているが、王国も一枚岩ではない。二人の王子のうち、彼女と結婚した方がこの国の王になるのではないかという噂もあるほどだ。

誰も知らぬ者がおらぬほどの重要人物。

なるほど、アルベルトが『挨拶に行け』と言ったのも頷ける。

魔女は、急いで一番最初に孤児院に来た時、彼が通された客間に向かった。

促され、彼もまた、魔女と共に客間へと向かう。

本来ならば、こちらから行かねばならず、更に言えば、待たせるなど不躰の極みである。

この孤児院にわざわざ向こうから来たのは、やはり『王立』であるが故の気遣いだろうか。

いや、変だぞ？

そもそも彼女は、こんな辺鄙な場所に、何故、『茨の魔女』と一緒に住むことになった？

ふと、彼の脳裡に、疑問が浮かぶ。

本当にドロテア姫なのか、何か、この国で起きているのか？

それは、茨姫の塔や、騎士の死と関係あることなのか。

答えは、まだ、出ない。

## 第8話

魔女・・・院長代理は、ハンスも一緒に挨拶をしないかと誘と馬鹿なことを言ったが、ハンスはもちろんそれを拒否した。

孤児院の人間ではないのに、孤児院に来た王女と会うなど、不自然極まりない。

一体何を考えているのかと呆れ果てた彼は、庭を孤児院に貸したり成り行きで、子供たちと最近よく一緒にいるとことで、すっかり孤児院の支援者であると街中の人間に認識されていることを知らない。本音では、ドロテア姫というより、西の魔女かもしれない茨の魔女を見たかったのだが、会わないと言っておいて覗くのも行儀が悪いだろうとやせ我慢をしたのだった。

いつもの、自分の部屋の窓を見る。眠り姫の塔が現れてから、それはすっかり習慣になっていた。

塔も孤児院も、そしてあのおかしな魔力の揺らぎも。全てこの窓から見つけたものだ。

本来ならば、街とは反対側、何もなかったはずの風景は、いまや、逆に何が起きるのかわからない場所へと変わっていた。

あの、魔力の揺らぎはなんだったのだろうか。

眠り姫の塔とも、騎士の死とも、茨の魔女とも、絶対に関連性がある。ないわけがない。

それにしても、あの魔力の竜阿木は一体なんだったのだろうか、

ハンスは考え込んだ。

ものすごい魔力だった。その『気配』も一人の人間のものというより、自然現象のような混沌とした『闇』だった。

あんなものを人間が背負えるわけもなく、さらに言えば操ることなどできるわけがない。

ない、と思うのだが、ハンスを侵蝕しかけたときに。それを止めた『行動』には、確かに意思が感じられた。

では、人ではない……？

ここで、彼の考えは堂々巡りとなる。

あの魔力の揺らぎは、人などではない。とすれば、別の何かだろうか……？

その時、ぞわり、とした感覚が背筋を駆け上がった。

「なんだと……?!」

思わず叫ぶ彼の視線の先には、再び魔力の揺らぎを生じさせた森が、黒々と深い闇を飲み込んで、たたずんでいた。

馬鹿にしゃがって

彼に見つかっても自重する気などないのか。彼の存在など取るにたらないということか。

ぎり、と奥歯をかみ締めると、黒いローブを纏い、いつもとは違う眼鏡をかけて、そっと外へ出た。

どちらも、ただの服装ではない。彼が精魂傾けて作成した、最高の魔道具であった。

ふわり、ふわりと闇に溶けるようにマントがゆらめく。見た目だけではない。魔力の追跡も、人としての気配さえも薄くなる。

今の彼の存在に気づくことは、よっぽどでない限り、ありえないだろう。

薄暗い森を進む。魔力の揺らぎはすぐそこにあっただが、気をつけなければならぬ。

迂闊に触れると、また、前のように『侵食される』可能性がある。

あの闇は圧倒的だ。おそらく、自分では正体を解析することも、解析しようと接触しようとすることすら、命取りになりかねない。

しかし、自分の技術の全てを魔法防御にまわせば、耐え切ることは可能だろう。

・・・可能だと思いたい。

魔力が、カーテンのように森の一部を覆っていく。普通の魔術師ならば見極めることすら、いや、継ぎ目があることすら気づかないであろう。

しかし、ハンスの特技は『解析』である。それは、実は最悪なほどに魔術師としての適性を欠いており、下手をすると魔術師としての

資格すら得られなかったかもしれない彼にとって、唯一と言っているほどの武器である。

その魔力に侵食されないように防御しながら、しかし、魔力の存在に場所を探ることに全身全霊を傾ける。

まわりつく蜘蛛の糸を避けながら、見えない雲を、気配だけで探るような時間が続く。

彼は、そのほころびを見つけ、滑り込んだ。

結界の内部は、外とさほど変わらない。

大掛かりなそれは、おそらく人の目から何かを隠すために張られたものであり、普通の人間、いや、魔術師が見ても、ただその場所にたどり着けないだけという単純な作用のものだ。

しかし、同時に単純であるということは、だからこそ強で確実だということでもある。

魔力感知が人並みはずれて高いハンスであれ、完全に結界ができあがった状態では、見つけることは不可能だっただろう。

そこまでに周到な結界だったからか、いや、それにもかかわらず、というべきか。

そこに隠されていたモノが、あっさりと、彼の前に現れた。

道端でバツタリと出会うような簡単さに、むしろ、ハンスも、相手も、息を呑む。すぐに反応できない。

それは、あの女性。

長い金の髪に、白い貴人のドレスを着た、青い瞳の女性だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7806u/>

---

西の魔女は眠る

2011年9月28日22時10分発行